

第17回 今年は正念場！？

IT生

阪神大震災以降、西日本は地震の活動期に入ったといわれてきた。その活動期にあっても、昨年は特異な年だった。阪神以降は、目立つ地震のペースは年に1~2回ていど。それが、昨年は4月の三重県南東沖と熊本地震、10月の鳥取地震と西日本だけで3つ。加えて11月に福島沖と計4つも起きた。

この昨年の状況をもってして、防災・地震研究者らは「今年が正念場かも」という。西日本では、南海トラフ地震の発生が近づくと、直下型地震が増加するといわれる。昨年12月に昭和南海地震から70年を迎えたが、次の南海トラフ地震にいたる西日本の活動期は、戦後の静穏期をへて、1995年の阪神大震災がスタートしたという見方が有力だ。



熊本地震以降、地震本の出版が相次ぎ、今後の地震発生を警告している

ある防災研究者は、「今年は、都市部に活断層がある奈良や京都など近畿が要注意ではないか」という。大阪もその危険性はあるが、京都、奈良が各年代で比較的地震が起きているのと比べると格段に少ない。

確かに近畿は、阪神大震災以降、被害をもたらす地震の空白エリアとなっている。東京など首都圏もそうだ。

このことひとつとってみても、近畿圏が要注意の時期にさしかかっているといても不自然ではない。

一方で、熊本、鳥取地震でも分かるように、耐震化、関連死をもたらす恐れのある車中泊、避難困難者などへの対策いまだに不十分だ。これまで、幸いにして、阪神大震災からあとの地震では都市部で大規模な火災はなかったが、京都や奈良、大阪の住宅密集地は要注意だ。新潟の糸魚川の火災をみれば分かるように季節によっては非常に危険な状態になる。また、関東大震災のように火災旋風が起こることもある。

地震の発生日時の予測は現在の科学では不可能だが、過去の事例をいくつか組み合わせれば、対策はたてられる。

ところで、ある人の言葉を紹介しよう。

「日本は美しい自然に恵まれています、その自然は時に非常に危険な一面を見せることもあります。この度の（東日本）大震災の大きな犠牲の下で学んだ経験をいかし、国民皆が防災の心を培うとともに、それを次の世代に引き継ぎ、より安全な国土が築かれていくことを衷心より希望しています」－東日本大震災5年追悼式にて、今上天皇－

聞きようによっては非常に辛辣な言葉であるが、この言をもって今年の始まりとしたい。

（平成29年元旦）